

ジャック・コポー 「ドラマの革新の試み」¹⁾

Jacques Copeau, « Un essai de rénovation dramatique » (1903)

ヴィユ・コロンビエ劇場

来たる 10 月、パリのヴィユ・コロンビエ通りに新しい劇場が開設される予定だ。ヴィユ・コロンビエ劇場という名称になるだろう。上演プログラムは、ヨーロッパの古典作品と、既に定評のある幾つかの現代作品、そして若い世代の作品で構成される。

この計画は、知識人同士の協調関係と共通の実践志向から共に闘うこととなった少人数の芸術家のグループが構想したものだ。長い時間をかけて練り上げられ、似たような計画も他にいくつもあった。幾多の障害を乗り越えねばならなかった。ついに実現に至るとすれば、それはいくら感謝しても足りぬほどの献身をしてくださった方々のお陰である。

万人を敵に回す気概無しには何も企てることはできない。ここ何年かの間、私たちは意気阻喪させる囁きに耳を慣らさざるを得なかった。人生で不毛な経験しかしてこなかった専門家の皮肉めいた警告、臆病者や懐疑主義者の悲観的な予測、堪能中の気晴らしの素晴らしさをとにかく褒めちぎってばかりの満足屋の助言、我々が自分の平穩を報いなき試練に曝し突拍子のない夢を追うのに全力を投入しているのを見かねた友人たちの忠告……実に様々なことを言われてきた。

だが、ひとつの理念のために敢えて自分を犠牲にし、その理念に尽くすことを本望とする者にとっては言葉は何の影響力も持たない。幸いにして、私たちは何に対しても絶望することなく成熟の年齢にたどり着いた。忌まわしい現実には、願望と憧れと意志を持って対抗するのである。私たちには、空想が、物事を始める喜びと勇気をあたえてくれる幻想がある。私たちを駆り立てる感情、突き動かし束縛・拘束する情熱（結局私たちはそれに負けることになるのだが）をより明確に名付けよと言われたとすれば、それは憤慨である。

とめどのない産業化が、日増しに破廉恥なやりかたで、フランスの舞台芸術を墮落させ、見識のある観客を

遠のかせている。厚顔無恥な商人たちに金で買われた一握りのお笑い芸人が殆どの劇場を占有している。どこもかしこも、偉大なる伝統がいくぶんかの羞恥心を生き延びさせてしかるべきような場所ですらも、どこも同じ大根役者の演技と投機をよしとする精神、同じ低俗さが席卷している。いたるところに、こけおどし、あらゆる種類の過激化、死に瀕した芸術に寄生するあらゆる性質の露出趣味がはびこっている。そもそも芸術などもはや問題にすらならない。そこかしこに無気力、無秩序、規律の無視、無知と愚かさ、クリエイターの蔑視、美の嫌悪がはびこっている。そして、ますます気違いじみた下らぬプロダクション、迎合に墮す一方の批評、更なる迷走を続ける観衆の趣味。こうしたものが私たちを憤慨させ、蜂起に駆り立てるのである。

他にも同じ憤慨を感じている人たちがいる。私たちより前からその憤慨を表明している者たちもいた。だが私たちの中でも一番寛容な者の多くはその怒りを徐々に放棄していった。威されて口をつぐんだのかもしれない。もしくは付き合い上、手を引かざるを得なかったのかもしれない。疲れて筆を取り落としたのやもしれぬ。新しい訴えの声は響きわたり新たな抗議は再興するであろう。だが、抗議するだけで足りるのだろうか？ 敗訴した件について闘うこと、批判の辛辣さに無駄に研ぎをかけること、もしくは手前勝手な軽蔑の中に立てこもること、これで十分なのだろうか？ 不満はあるが何もしないという人には私たちは用がない。一番まともな人たちが、自分たちの好悪をはっきりさせ全体の腐敗を超越したところに個人的な趣味を維持していられればそれで満足だとしている一方で、悪しきものが私たちの周りではびこっていき、まもなく私たちは、自分たちの芸術の分野・自分たちの属する領域に足を踏みおろせる場所がなくなってしまうだろう。

今日では優れた作品をつくるだけでは事足らないと私たちは思っている。その作品をどこで上演させてもらえるのか、作品の良さが存分に発揮できるような環境で、観客と役者が同時に見つかるのか。こうして、宿命的に

1) [訳注] 初出は *Nouvelle Revue Française*, septembre 1913、底本には Jacques Copeau, *Etudes d'art dramatique - Critiques d'un autre temps*, NRF, 1923, p. 232-237 を使用した。

「絶え間なき請願」として次の問題が私たちに課されることとなる。それはすなわち、新しい演劇を完全に手つかずの土台の上に育てるという課題だ。また、新しい演劇は、劇作家、役者、観客……舞台でのショーに美しさを取り戻す必要に悩まされる全ての者の合流点であるべきこと。この奇跡はもしかしたらいつか実現するかもしれない。そのとき未来が私たちの前に開けるのである。

なぜなら現状からは何一つ期待できるものがないからだ。今あるものは何に関してもあてにしてはならない。健康と命を取り戻したかったら、形、本質、精神、習性が腐敗したものと接触は拒絶したほうがよからう。

現代の演劇の制作において、あらゆる種類の、時には非常に貴重な才能が現れているのを見くびってはいない。それらの才能は、熱に浮かされたように、惜しげなく投げ出され、ばらまかれ、無駄に浪費されている。方向付け、規律、真摯さ、そして何よりも誠実さがないと、才能はいかなる場所でも集中できず、芸術作品の達成に至れないのである。物事を少し俯瞰してみると、ドラマの形態を確立して天分を顕す野心を抱く真のアーティストがいない、そんな状態が何世代も続いていることに嫌でも気がついてしまう。その能力がまさしく演劇向きなように見える時ですら、アーティスト本人は常にどこか他の分野に逃げ場を見つけてきた。自分の狙いからはより遠くなっても、そちらのほうが自分に相応しいと本人は思っているのだ。要するに、ソボクレス、シェイクスピア、ラシーヌ、モリエール、イブセンのような人物たちが作り上げて満足してきた演劇というこの道具は、なすすべもない、廃用された存在、新しいものを受け付けぬ強い力を持った手の中ではあまりにも脆いものなのだろうか？ いや、そうではない。だが、演劇は忌まわしい慣行の中で墮落していったのであり、今日、自由に美の作品を作ることを望む者が演劇を手段として使うことは禁じられているようである。

ここ 30 年、私たちはいくつかの本物の才能が舞台に向かうのを見てきた。一部の者が、おそらくは自覚のないまま、初期の成功が安直な人たちに残した融通手形をそれとなく受け取って維持しているのも見てきた。彼らは、搾取され歪められた才能から、この空っぽの威信を引き出し、以来、それを大衆に対して行使している。他方で、確たる気骨と芸術への敬意により守られている者たちが、もはや自分たちを腐敗させるためにしか受け入れてくれない演劇から離れていくのも目にしてきた。彼らの才気は減速し、インスピレーションは疲弊してい

る。全ての者に、黙るか、退くかの二者択一が押しつけられたのだ。

このような状況はアーティストの力の妨げとなり、現代の舞台をもはや後がない状況に追い込んでいる。そして、アーティストがそれに対し示す反発と嫌悪感。これが今の演劇にとどめをさし、演劇をまさに「芸術の中でも最も評判が悪いもの」(妥当極まる表現である)にするのである。

私たちは演劇にその光輝と偉大さを取り戻してやりたい。この企てにおいて、仮に才能がなくとも、決然たる熱意、集結された力、無私の心、忍耐、段取り、知性と教養、良くてきたものに対する愛と欲求を持ち込むつもりだ。だが、そうした努力も、生活がかかっている者たちでなければ誰に期待したら良いのであろうか。密売人でもなく、素人の愛好家でもなく、傲慢な耽美主義者でもなく、自身の芸術における肉体労働者である者たちだ。彼らは、仕事慣れしており、自分たちの手と頭脳から何でも作り出そうと工夫を凝らす。材料を揃え、計画を立て、それに沿って土台から屋根に至るまで材料を組み立てる。私たちはまだ若いのだし、目的とそれに到達するための実践的な方法を意識しているのだから、躊躇するのはやめよう。もう何ものにも私たちの進路を逸らさせるまい。二次的な活動はすぐさま打ち捨てよう。一発でやるべきことに向き合おう。現場ですぐさま取りかかるべきである。すべきことは膨大であり、大変な仕事となろう。私たち自身で最後まで成し遂げられるとはとても思えない。他の者たちがおそらくこの大仕事を仕上げてくれるだろう。せめて、やがて活気を放つだろうこの小さな核をかたちづくることを試みよう。そのまわりには未来が大きな貢献をもたらしてくれるだろう。

大いなる希望と野望を見せてしまうことを私は恐れていない。最初に試みる作品はきっと私たちの希望と野心には全く比べものにできないだろう。それについてもしっかり自覚している。ヴィユ・コロンビエ劇場がどういうものになるか、今の時点で言わなくてはならない立場の私としては、これを読んでくださった皆さんに私たちの慎ましい気持ちをわかって共感していただきたい、そして、私たちの活動計画は、偶発事も避けるどころか計画し、対峙することを認識していただきたいのである。

(訳：田中晴子)